

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.184  
2019.1.1  
謹賀新年

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

### ● 第25回 ● 「類似度順序形態学」の学史的意義

坪井正五郎が実践する本草学の素養を活かす形態学は、**相異なる階層的分類、及び比較による類似関係の両者を統合する点に独創性が窺われ、「コロボックル風俗考」以前は西ヶ原貝塚という特定遺蹟の遺物を分類の中心に据えた比較による「類似の形態連繫論」を進めてきた。**それに対し、「コロボックル風俗考」以後は特定遺蹟からではなく、**特定主題の遺物から該当遺蹟に接近する**という「異地方発見の類似土器」に到達し、新たに「類似度順序形態学」を開拓する。両者は共に立体物である突起の類似をテーマとし、対象地域に関する連繫論文としてこれまで通りに共通しながらも、実は課題を特定遺蹟に置くか、それとも特定主題に置くか、という目的の違いにより、**実践する形態学は比較論理構造が全く異なることを示している。**

その結果、「異地方発見の類似土器」は**類似の意義と類似度の深度において西ヶ原貝塚とは全く次元を異にする着想を得ており、最終的には「ヒト」の生態的分析法という視座を獲得し、モースの進化論を完璧なまでに超克するが、その過程ではペトリー(W.M.F. Petrie)との関係も気になる新たな「類似度順序形態学」の萌芽に至る沈黙の型式学が日本考古学史上初めて浮上する。**即ち、ペトリーによる著名なSD(Sequence Dating)法が普及する1905年(『考古学の方法と目的』)以前、しかも1903年には新古の検証に層位(一括遺物)の適用に到達するモンテリウスと出会う以前の日本考古学が、シーケンス理論やルジメントの端緒を暗黙に実践していたことは大きな驚きで、確かに**当時の欧州には学ばべき型式学を見出すことはできないのである。**

一方、「異地方発見の類似土器」(明治29年4月)とは別に、人種論にとってはアイヌと

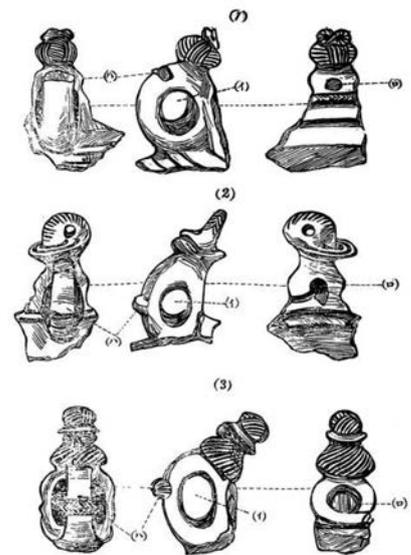
の関係に於いて**異年代発見の模様比較**も新たに賑わいを見せるが、ここでは類似の程度問題が新たに浮上する。類似には似ている度合いを示す類似度、即ち、類似の対象が文様素レベルか文様素の配置構成レベルか等々の比較レベルの階層化までを含む類似の体系化が構想される。ここに「**アイヌ模様と貝塚模様との比較研究**」(明治29年2月)に端を発する「**日本石器時代人民の模様とアイヌの模様との異同**」論争が興り、後にペトリーに師事する若き学生・濱田耕作との間で坪井正五郎の「**模様文法論**」が開陳される因縁は余りにも奇遇である。この「**模様文法論**」は「**似て非なる相異関係**」を明確にする重要な構造化理論で、「**類似度順序形態学**」が「**類似の中の究極の類似関係**」から立論する手続きであることと極めて対照的な方法でもあり、改めて「**亀ヶ岡式**」を含む**縄紋式後晩期の型式学方法史**として刻印すべきである。

蛇足ながら相異関係は**相異度を測る基準が多変量となり優先順位付けが難しく、今日の先史考古学でも相異の程度そのものを正解へと導く道程は困難に思える。**特に広域における個別類似の取り扱いは今日に於いても手続きが曲者で、例えば1987年に伝播による類似関係を先入観とする議論から構造的相異関係へと解放させた経験があり、**変化の「流れ」構造を相異の視点として導出した北奥「遠賀川系土器」は、年代的系統的弁別に基づくならば比較不能な「偽類似」としての明示に至るが、未だに「遠賀川式土器」の「流れ」に無理やり組み込む伝播による類似思考法が見られる等、型式学を高度化に導く習熟が今以て希求される。**閑話休題。

さて、突起における「**類似度順序形態学(モノ・シーケンス理論)**」には坪井正五郎自身が**認識・明記する大きな弱点**がある。それ

はペトリーもモンテリウスもその手続きには年代の新古が判明する資料を比較の標準に用い、特定の資料間では始点と終点の担保付きで順序の推定が検証可能である。他方、坪井正五郎の「**石器時代総論要領**」(明治30年)の頃は未だ日本石器時代に新古の確証は層位的に得られておらず、従って**シーケンスの始点と終点は仮設であり、逆転もあれば、途中で分岐し別なシーケンスとなり得ることも自明であることから、最も重要な課題は始点の特定となる。**

しかし、始点の特定という理論的課題は重く受け止められず、広範囲における日本石器時代土器の**体部の模様には触れずに突起のみに限定した分類毎に個別かつ独自の前提を附し「類似度順序形態学」の適用に至る**のが、本連載第2回で触れ第30図に示す「**沼部式**」の沼田頼輔が開陳する「**把手の分類**」(明治31年4月~8月まで4回)と銘打った連載論文である。



▲第30図 「沼部式」と分類された「加曾利B1a式」注口付土器把手

\*巻頭連載は隔月です。次回は 大村裕 さんです。

## 目次

■加曾利B式土器 「類似度順序形態学」の学史的意義(第25回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第18回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第177回) 永瀬史人 …3  
■考古学者の書棚 『考古学者が読んだハイデガー』 青山 航 …4

## 考古学の履歴書

## ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第18回) ————— 間壁 忠彦・間壁 葎子

## 5. 富比売の出現(天平宝字七年銘の墓地買地券)(1)

天平宝字七年といえは763年・奈良時代後半で、この翌年には、一度退位していた孝謙女帝が、藤原仲麻呂の乱を経て、再度即位し称徳女帝となった頃の事である。だがこのタイトルの富比売(とみひめ)さんの天平宝字七年銘墓地買地券にたどりつくには、まさに「..それでは 何だ」が長かった。

…1979年11月21日、40年近くも昔のことだが、私たちにとってはこの間のようにも思われる。既に故人の京都大学教授岸俊男先生からの電話だった。

「近年出土でまだ発表されていないが、太宰府の宮ノ本遺跡から、日本最初の鉛板墓地買地券が発見された。発表の時の説明を求められているのだが、その際、先日墓地買地券を話しても良いか」が、その要旨…こちらで即答したことは「先生があれを日本での墓地買地券と認めてのお話と思いますので、こんな嬉しいことはありません」…これで やっと富比売さんも市民権を得た！の思いだった。

というのもその年の5月、学会で上京する際に、問題の「矢田部益足之買地券文」と称されてきた遺物の、拓本、私達の釈文、写真などを持って、全く面識も無い古代史研究の泰斗岸先生のところへ、教示いただきに立ち寄っていたのである。

この資料は江戸時代後期文政年間(1818~1830)に、現在の倉敷市真備町大字尾崎字瀬戸出土とされている。…(この地は全くの偶然ながら、今年(2018年)の7月6~8日の大豪雨による洪水で、町内の4分の1が水没した姿や、50人もの溺死者を出したことで全国にその名が知られたと思う。身近な地域であり、言葉も無い哀惜の思いであった。同地に保管されていた多くの遺物も水没したと聞く)…ところで現在も倉敷考古館に保管されている筈の問題の遺物は、ほぼ同形の板状土師質磚(縦約42cm・横約21cm・厚2.1cm)2面で、それぞれ片面に50余文字が焼成前に、へら状工具で刻字されていた。しかし発見時より両面とも破損し、表面の磨耗も激しい部分があったようで、当地方の幕末の学者も幾人かは検討・判読していたが、意味の通る釈文とはなっていなかった。ただ2面は同文と見てよく、当地方では2面共に良く解読できた、文末の「矢田部益足之買地券文」によって、この磚製資料はこの名で呼ばれてきた。

本資料は、当地方で江戸時代末著述の「備中誌」にも記述され、現代社会になっても1930年発行の永山卯三郎著『岡山県金石史』に収録されている。当地方では、一応知られた資料であった。倉敷考古館では、開館時の1950年から、発見時よりの所蔵家の厚意で寄託され、展示を続けていた資料だったのである。

だが私どもが倉敷考古館職員として初めて関わった時から、開館の指導に当たった先生や先輩方より、正確な理由のないまま、全く例の無いものであり、この資料は疑問があると聞かされていた。また折々に館を訪れた、考古学や古代史の専門の方々意見聞いても、問題にされない様子であった。

こうした方々が明確なことを言われないのは、私たちにも理解できた。奈良時代の銘を持つ、古く出土とされたような資料で、間違いのないものは、当時『寧楽遺文』(東京大学史料編纂所

竹内理三編纂)に収録されていると考えるのが常識。同書には『岡山県金石史』も参考文献としながら、この「矢田部益足之買地券文」は収録されていない。専門家であればあるほど、この事実は承知のはず。しかもわが国での道教影響下で作成される墓地の買地券とは??..

わが国の奈良時代には、中国からの仏教教義や信仰・文化は、国の方針もあり各地に浸透したが、中国で広く受容されていた道教の影響は、殆ど見られぬものと考えられていた。墓地買地券を作るというのは、道教思想のもと、墓の地は土地神から買い取ったことを証明する地券をつくり、墓地に埋置する習俗を指す。其の地券は、主に鉄・鉛・焼き物の板状品で、後漢代から三国・六朝期に盛行し、形はともかく、以来、清代までも続く習俗だったといえる。隣国の韓国で1971年に新発見され話題となった、百濟国武寧王と王妃の合葬墓から、発見された墓誌と表裏になった墓地買地券を思い出すことはあっても、わが国の考古遺物としては全く馴染みの無い物だったのだ。

今ひとつ心証を悪くした材料に、この墓地買地券文磚が発見された地点は、著名な吉備真備祖母の和銅元(708)年銘骨蔵器発見地点と近接している(両地点間は、同じ小田川沿いで4kmばかり)。骨蔵器発見は元禄12(1966)年、買地券発見より100年ばかり前とは言え、骨蔵器は地元の寺に伝えられていた。これは江戸時代を通じ学者や、好事家には周知されている。周辺には明らかに弥生時代土器片に刻字されたものまであった。2面の磚は骨蔵器を知る者の偽作ではないか。しかも土師質板状品の磚本体に関しては、私共にとっても、土質・製作・焼成法とも時代が断定できる特徴は無い。

奈良時代、死者のため墓に副葬された墓誌は、古くは文暦2(1235)年に、僧行基の墓誌断片が発見されているが、多くは江戸時代発見であり、近年の1979年には、『古事記』の選者太安万侶の墓誌が発見されたこともあり、わが国でもその存在は一般的に知られているだろう。ただその数は中国に比べて極めて少なく、20例にも達しない。もちろん墓地買地券的なものは1例も無かった。本件資料が疑問視されたのも、無理からぬものであったのだ。私たちの逡巡はまだ続いた。

## 間壁忠彦 略歴

1932~2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

## 間壁葎子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。今回は井川史子先生です。

## Jレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 177

みずがみ

## 水上2遺跡 ～青森県西目屋村～

永瀬 史人

水上2遺跡は、青森県の津軽地方を南北に貫流する岩木川の上流に所在します。前回紹介された川原平1遺跡と同様に、県内最大の津軽ダムの建設工事に伴って2006年から2014年にかけて発掘調査が実施されました。青森県に奉職した4年間、この水上2遺跡の調査と整理作業に明け暮れていました。今や、ダムの底に沈んだ遺跡の運命に心を痛めていますが、縄文時代の集落跡を全面的に掘りあげたその内容には圧倒されるばかりで、北東北の縄文文化に強く惹かれるきっかけを与えてくれました。

水上2遺跡は、縄文時代早期中頃には土地利用の痕跡が認められますが、本格的に居住活動が盛んになったのは縄文時代前期末葉から後期初頭の期間です。円筒土器文化の集落の特徴とされる列状に群在する250軒以上の竪穴住居跡のほか、6700基のピット群や、深いところで2mにもなる捨て場や盛土遺構などが発見されました。とくに注目されるのは、集落の中央付近に造営された中期末葉から後期初頭にかけたの25基の石棺墓群です。大きく3群に分かれており、このうち「A群」とした一群は15基の石棺墓と52基の配石で構成されていました。時期が新しくなるにつれて、堀方をもたずに盛土と配石で構築された石棺墓も認められ、全体にマウンド状の景観となる点も特徴的です。東北地方の石棺墓といえば、再葬土器棺墓の一次葬用の施設とする見方が広く定着していますが、石棺墓内の堆積土や墓地としての様相からは人がそのまま埋葬されていたとも推測され、石棺墓研究に一石を投じる成果になるでしょう。



▲縄文時代中期末葉～後期初頭の石棺墓と配石遺構  
(写真提供:青森県埋蔵文化財調査センター)

遺物の出土量は、三内丸山遺跡、川原平1遺跡に次いで多量であり、土器の総量では28トンも検出されました。

多種多様な出土遺物の中で、調査員一同がもっとも驚かされたのが、捨て場から発見された四脚をもつ土偶です。「椅子に腰掛けた土偶」として新聞にも取り上げられたことから、一時期、話題になりました。人形の上半身と四脚をもつ台座のような土製品が合体し、欠損して失われた両腕はその両端に繋がっていたとみられます。高さは7.7cm、幅は6.1cmと比較的に小型です。出土した他の土偶がデフォルメの著しい板状で

あるのに対して、肩甲骨を表したとみられる背面や大きく膨らんだ腹部の表現は写実的で、当地の土偶表現としては異質といえます。類例のない唯一無二の珍品ですが、逆三角形の顔と表情は平川市堀合遺跡の土偶とよく似ていることから、時期は中期末葉から後期初頭のものと考えています。



▲四脚をもつ土偶(写真提供:青森県埋蔵文化財調査センター)

さらに、興味深い資料の一つが縄文時代中期中葉円筒上層b式の顔付土器です。胴部上半部分に粘土紐で装飾されたM字形の眉と押捺縄文で表現された眼が描かれており、同時期の土偶の顔と共通しています。欠失して全容は不明ですが、顔の位置関係から同様の表現が土器全体に5面描かれていたと考えられます。円筒上層式土器では、把手部分に顔が描かれることがありますが、胴部全周に描かれた事例は今のところ確認されていません。中部地方を中心に分布する勝坂式土器とは異なる顔の表現方法に、円筒土器文化の独創性を感じることができます。

津軽ダムの建設によって多数の貴重な遺跡が失われましたが、川原平1遺跡や水上2遺跡などの調査を通じて、白神山地に根ざした縄文文化の特色が明らかになりました。調査と整理に格闘した日々を思い出しながら、今後も当地の遺跡や資料と向き合って研究を続けていければと願っています。



▲顔が装飾された深鉢形土器  
(写真提供:青森県埋蔵文化財調査センター)

## 青森県立郷土館

平成30年度企画展

新説!  
白神のいにしえ

会期 11月21日(水)～1月20日(日)  
(12/29～1/3は休館)

〒030-0802 青森市本町2-8-14  
TEL 017-777-1585

HP <http://www.kyodokan.com/>

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは丸尾弘介さんです。

## 考古学者の書棚

## 「考古学者が読んだハイデガー 考古学者はそこに何を発掘したのか？」

佐藤啓介／青土社「現代思想 特集考古学の思想 2018年9月号より」(2018) ————— 青山 航

私が現在興味を持っているのは縄紋時代早期から前期にかけての時期で、土器の編年研究をもっぱら行っている。編年研究では、これまで特に紋様の変化を考えてきた。最近ではその背景にある事象は何かということにも興味があり、ただ単に表面的に紋様を追うのみでは難しいとも考えている(もちろんその先には当時の社会復元の方法があるのではと考えている)。

そうした現状で最近読んでいる本が『現代思想 特集考古学の思想』である。その中でも佐藤啓介氏が書かれた「考古学者が読んだハイデガー 考古学者はそこに何を発掘したのか？」が特に印象的な論であったので、書評させていただきたい。本書の章立ては、

- はじめに ハイデガーと考古学
- 一 「ハイデガー」考古学前史
- 二 ハイデガーを考古学に適用する 一事物・世界・時間性
  - A 事物との出会い方
  - B 事物と出会う構造としての「として構造」
  - C 事物と世界性
  - D 世界と実践
  - E 世界と諸側面
  - F 事物の時間性
- 三 ハイデガー考古学が目指したもの
- おわりに 一考古学とハイデガーの出会いをどう評価すべきか

である。

まず佐藤氏は南山大学で宗教哲学の教鞭をとられる哲学者である。その一方で、学生時代発掘調査のアルバイトをされていたそうで、考古学系の研究会にも参加されるなど考古学にも相当精通した方である点をまず触れておきたい。また、本論のなかで幾度となくのべられているハイデガーは19世紀～20世紀のドイツ人哲学者で、著書『存在と時間』は20世紀最高の哲学書とも称させている。特にハイデガーが論じたのは存在とは何かということである。

本論では、はじめにの中で考古学が現代思想との接点を持った事例としてジュリアン・トーマスの事例を挙げ、考古学とハイデガーとの関係を論じている。

一 「ハイデガー」考古学前史では、ホダーやテイリーをモデルに挙げ、各考古学者が「道具の意味」を論じているが、それは道具の物理的効用と道具が社会においてもつ象徴性・記号的意味に限定されていた点を指摘。効用以上の何か、象徴的意味以前の何かを考えるためにトーマスがハイデガーの哲学へと向かわせたとしている。

二 ハイデガーを考古学に適用する一事物・世界・時間性のなかでは、A～Fの6の節に分類している。Aでは、トーマスが道具のような事物とどのようにして出会うかに注目しハイ

デガーに学ぼうとしたとしている。ハイデガーは「手前存在」と「手元存在」を考えているが、「手前存在」を考古学で考えるのは不可能としている。Bでは、ハイデガーの「～として」構造に着目しつつも、これについてもA同様考古学では立証が難しいとしている。C以降ではトーマスのハイデガー哲学の応用例として、トーマスは道具の使用の同時性や共存性、製作技法の共通性や外見の類似性から事物のネットワークを類推しようとしたとしていると述べている。これを更に掘り下げていく中で、トーマスは事物の時間性に着目することで、考古学的に観察する「事物の存続」や「事物の型式変化」に意味を与えようとする戦略をとっているとしつつも、現存在を分析するハイデガーと、過去の事物を見ようとするトーマスの両者には差異があるとした。

三 ハイデガー考古学が目指したものでは、事物一つひとつを手がかりに、その事物にかかわっていた人間の存在のあり方、そしてその人間が住まっていたという世界の変容を示すのが、最終的な目標だったと結論づけている。

おわりに一考古学とハイデガーの出会いをどう評価すべきかではトーマスのハイデガー哲学の援用の試みを評価しつつも、「本当にハイデガーによる原存在分析の枠組みを、過去の人間に当てはめてよいのか」という疑問を呈している。そして、その上でそもそも道具に実用性以上の「意味」があったのかという点に言及し、それが現在社会すなわちハイデガー哲学への問題点にもなっているとしてまとめている。

考古学は『モノを持ってモノに語りしめる学問』であり、そのモノから当時の精神文化や社会復元まで論を飛躍させさらに証明することは難しい作業である。それは本書でトーマスがハイデガー哲学を援用しつつも「手前存在」までは求めることができなかったという点にも当てはまる。それが考古学の限界なのかもしれない。

その一方で、佐藤氏はその限界に関して現代でも「手前存在」がないモノもあるのではないかと指摘しており、過去のみではなく現代社会に生きるわれわれにも「往還する」議論でもあるというメッセージを残しているような気がした。

私を知っている方に言わせたら哲学もなさそうな人間が何を偉そうにとおっしゃるかもしれない。この『考古学の思想』という本は佐藤氏の論以外もこれまで何度も読み直しているが、本そのものが哲学的で難しく半分も理解していない。そんな私が書評を書かせていただくのはおこがましい限りであるが、この本は最近読んだ本のなかで最もインパクトがあり、また最も考えさせられている本であることは間違えない。

## アルカ通信 No.184

発行日	2019年1月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
	TEL 0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp